

社会科

価値的・実践的判断を促す中学年社会科の学習

—— 「安全なくらしを守る」(第4学年)を事例として ——

朝倉 淳

1. はじめに

価値的判断とは、ある社会的事象・事物に対して「これでよいのか。」「問題があるのか、ないのか。」などを問い、それを価値づけたり評価したりする判断である。実践的判断とは、ある社会的事象・事物に問題や目標・目的があるとき、「どうしたら解決するのか。」「どうしたら実現するのか。」など、問題解決や目標達成・目的実現のための方法や手段を選択したり決定したりする判断である。

このような判断は、社会科において「生きる力」の育成を考えると、ますます重視される必要がある。社会科における「生きる力」とは、公民的資質そのものであり、価値的・実践的判断をする力はその中心的なものだからである。

社会科教育に関する先行研究においてはこれまでも、社会科の授業構成に価値的判断や実践的判断を組み入れることの重要性が指摘されている。⁽¹⁾

また、それを組み込んだ授業構成について、いくつかの提案がなされている。しかし、具体的な事例はまだ少なく、学年段階に応じた展開やその問題点は明らかになっていない。小学校中学年の社会科においては、どのような授業構成をすれば、価値的・実践的判断を促すことができるのだろうか。また、実際には、どのような学習となり、どのような問題があるのだろうか。

このような問題意識をもとに本研究では、次の2点について考察していく。

- ① 価値的・実践的判断を促す小学校中学年社会科の授業構成
- ② 授業構成に基づいて開発した第4学年「安全なくらしを守る」の授業展開と問題点

2. 価値的・実践的判断を促す中学年社会科の授業構成

子どもたちが学習の中で価値的・実践的な判断をするように促すには、次の3点を満たすように授業構成をする必要がある。

- ① 社会的価値葛藤問題を内在する素材を教材化する。
- ② その問題が子ども問題となるようにする。
- ③ 学習の過程を判断の過程に沿ったものにする。(図1)

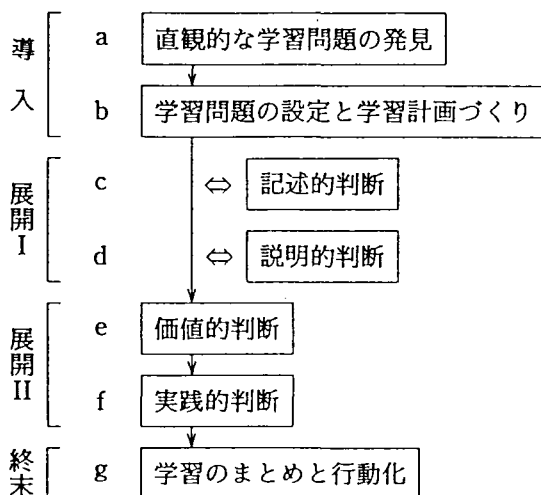


図1 社会的判断力を育成する学習過程モデル⁽²⁾

なぜなら、問題のない素材からは、価値的・実践的な判断を求めようという問いは生まれないからである。また、問題が子どもたちのものにならないときには、問いに対して判断していこうとするエネルギーも高まらず、判断が主体的なものにならないからである。さらに、判断が単なる思いつ

きにならないように、図1のように記述的判断や説明的判断を通して吟味する必要があるからである。

それでは、中学年の授業構成にあたってはどのようなことに留意する必要があるだろうか。

中学年の子どもたちの活動の特性を考慮するならば、子どもたちとの「かかわりの深さ」に留意して授業構成をすることによって、価値的・実践的な判断を促すことが可能であろう。具体的には、次のようにすることによって、価値的・実践的判断を促すことができると考える。

- ① 子どもたちの日々の生活と直接かかわりがあり、社会的価値葛藤問題を内在する社会的物事・事象を素材として選択する。
- ② 子どもたちのかかわりを生かして、その問題が子どもたち自身の問題となるようにする。
- ③ 判断の過程に沿った学習の過程に、観察・見学、そのほかの体験的な活動を取り入れる。

3. 価値的・実践的判断を促す授業展開 — 「安全なくらしを守る」(第4学年) —

(1) 単元設定の理由

いろいろな災害から私たちの生活を守るために、消防署や警察署や市町村役場は、地域の住民や関連諸機関、近隣の市町村などと連携し、組織的・計画的に災害を防いだり災害に備えたりするための活動をしている。災害に際しては、諸機関が密接に連携し一体となって活動しなければならない。災害から生活を守る活動について調べたり考えたりすることは、生活様式の変化の激しい社会に生きる子どもたちにとって、安全な社会のあり方を求める意味で意義深いことである。

教材化にあたっては、これらの活動を個別に固定的にとらえるのではなく、安全という大きな枠組みの中で柔軟にとらえることができるようにする必要がある。

(2) 単元の目標

- 生活の安全に対する関心を高めるとともに、安心して生活できるような社会をつくろうとする態度を育む。

- 地域にある安全を守るための施設や設備、機関とその働きについて知り、そのあり方について考えるようにする。
- 学校や地域、機関を安全の面から実地に調べ、見学・観察の能力を育てる。

(3) 単元の構成

- 第1次 実態調査・学校の安全(2時間)
- 第2次 導入・学習課題と学習計画づくり(2時間)
- 第3次 地域の安全点検をしよう(5時間)
 - ① 学習課題の設定と学習計画づくり
 - ② 学校のまわりは安全か(観察)
 - ③ 学校のまわりは安全か(話し合い)
 - ④ 安全にするにはどうしたらいいか(個別)
 - ⑤ 安全にするにはどうしたらいいか(話し合い)
- 第4次 警察署の働きを調べよう(4時間)
- 第5次 消防署の働きを調べよう(5時間)
- 第6次 三原の町の安全を考えよう(3時間)

ここでは、構想に沿った展開のモデルとして、第3次の授業展開を提案する。第3次の流れを前述の図1に沿って示すと、図2のようになる。

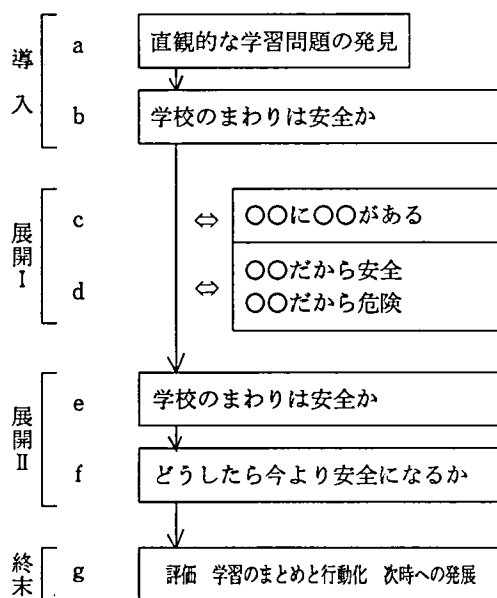


図2 単元「安全なくらしを守る」第3次の流れ

(4) 授業の概要 (第3次)

学校のまわり (周辺) は安全か。

第1時に、阪神大震災のVTRを用いて、緊迫した状況をこのような問題設定と学習計画づくりをした。

第2時では、学校のまわりの観察を行った。子どもたちは、安全を守るものを見つけたり、危険な箇所を見つけたりした。

第3時では、前時に見つけたことを出し合い、どのように安全が守られているのか、なぜ危険なのかを話し合った。その結果、

学校のまわりは安全とは言えない。

とまとめられた。

第4時では、いくつもの危険箇所のうち、学校の校門のところ (図3) に焦点をあてて学習を展開した。

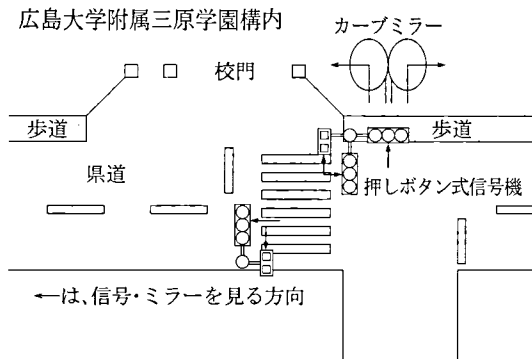


図3 学校の校門の前のようす

学校の校門のところについて、子どもたちは、「たくさんの方がぶつかったりしてけがをしたり、あぶないめにあっている。」ととらえている。このような状況について、子どもたちは次のように分析している。

- ・ 信号を無視する (信号に気づかない) 車やバイク、自転車がいて危ない。
- ・ 南側から左折する車がすぐ横断歩道を横断中の人にぶつかるようになる。

そして、次のように問題設定をした。

学校の校門のところを今より安全にするにはどのようにしたらよいだろうか。

この問題に対する各自の判断を画用紙にまとめた。(資料1 資料2)

(資料1)

Handwritten student proposal on a sheet of paper. The title is '横断歩道を西によせる' (Move the crosswalk to the west). The main text says '学校の前の地図' (Map of the area in front of the school). Below this, there are two diagrams showing the current crosswalk location and the proposed location. The proposed location is further west. The text explains the reason: '理由' (Reason) is '三原小(西)によせると、曲ってくる車が、わたっているのが、よく分かる。' (If we move it to the west of Sanriku Elementary School, it's easier to see cars turning from the west). Another point is '曲ったら、急に横断歩道があたり、危なくても、とひ出てしまう。' (When turning, the crosswalk is suddenly in front, and even if it's not dangerous, people might suddenly step out).

(資料2)

わたしは
地下道を作りたい

理由
信号を、まっていたら、時間が
たっばかりだし、青になつたら、い
そいで走ってから車にひかれてしま
うから、地下道を作ってみたら、信号をま
たなくてバツにあせらなくてもいいから
地下道を作つたらいいと思う。

第5時では、この各自の判断を出し合い、話し合
いを通して吟味していった。表1は、話し合い
の内容をまとめたものである。

話し合いの後、どのようにすればよいと思うか
投票した。結果は、次の通りである。

- ①- 0票 ②- 21票 ③- 0票
④- 1票 ⑤- 1票 ⑥- 14票
⑦- 0票 (①~⑦は表1に示した方法)

話し合いでのいろいろな意見と投票の結果につ
いて、「実際にこのように考えられるのか。」とい
う問いが生まれた。専門家に聞いてみようとい
うことになり、警察署で自分たちの考えを確かめ
ることになった。

課外として、警察署でのお話を聞き、第3次を
終えた。お話(要約)は次の通りである。

たいへん大切な学習をしましたね。学校の
正門のところを安全にする方法をいろいろと
考えているのでびっくりしました。

表1 正門のところを安全にする方法

	よいところ	問題点
①歩道橋をつくる	人が歩くところと車の通るところが分けてある。	せまくて通りにくい。 自転車は通りにくい。 お金がかかる。
②地下道をつくる	人が歩くところと車の通るところが分けてある。 雨の時もぬれない。 お年寄り、目の不自由な人も通りやすい 自転車も通れる。通れない。	地震で崩れる。 上から見えなくなるので、あぶない。 たまり場になる。 寒い。 お金がすごくかかる。
③道路を高架にする	人が歩くところと車の通るところが分けてある。	車が学校に入れない。 お金がすごくかかる。
④シャッターをつくる	時間で人と車を分けて、シャッターで、 信号無視して入れないようにできる。	シャッターをつくるのに壁か柱がいる お金がかかる。
⑤交番をつくる	信号無視がへる。 無視したとき、すぐ通報できる。 4つつくればいいけど1つでもつくといい。	つくる場所がない。(家がある) お金がかかる。 もっと交番がいるところ(2号線ぞいなど)につくれなくなる。 ずっとは、見張れない。(夜はどうするのか。)
⑥横断歩道を西にずらす	車がくるところを3箇所から2箇所にできる。 今は曲がったらすぐ横断歩道だけど、すこしはなれるのでよく見える。 お金は少しですむ。	信号を無視したら、同じことになる。
⑦空を飛ぶ車にする	人が歩くところと車の通るところが分けてある。	まだ、できそうにない。 空にガソリンスタンドがある。 落ちたらよけいあぶない。

安全にするために一番いいのは、人が歩くところと車の通るところを分けることです。

①②③は、人と車を分けていますね。ただ、こういうものを作るには少し時間とお金がかかるので、すぐというわけにはいきません。

④のシャッターはいい考えですが、日本にはありません。外国にはあるそうです。

⑤の交番は、作ることができません。ある広さの中を作る交番の数が決まっているからです。もし作るとしたら他の交番を移すことになるでしょう。ただ、そのかわりに警察官がそこに立ってみるといのはどうでしょう。

⑥はよく考えていますね。わりあい簡単にできそうです。交差点のようすをよく調べてみたいと思います。

⑦はなかなか楽しいですが、まだかなり時間がかかりそうですね。

4. 考 察

第3次は、校内の授業研究の一つとして、実践したものである。

第3次の展開について、協議会での意見や授業者自身による授業分析の結果、構想に沿って構成され子どもたちとのかかわりの深い教材となっていたという評価を得た。同時に、次のようないくつかの問題点も明らかになった。

(1) 教師の支援について

子どもたちに問いが生まれ、子どもたちが主体的に判断していくような単元構成をしていくことが最大の支援である。合わせて、子どもたちの判断を支える、ものの見方や考え方を育てていくことも重要である。たとえば、第3次の第3時では、安全を守るものや危険なところを出し合う中で分布ということ着目させ、そのような見方を育てることができる。中学年の子どもたちにどのような見方や考え方を育てるのか明らかにし、その視点で、授業者が積極的な働きかけをしていく必要がある。

(2) 安全ということについて

「安全とは何か。」について、話し合いを通してもっと吟味する必要がある。子どもたちが「安全を守るためのもの（安全施設・設備・制度・活動など。以下同様。）があるから安全。」というように単純にとらえてしまう可能性があるからである。

ある場所が安全か危険かということと安全を守るためのものとの関係は、次の4通りに分けられる。

- ① 危険はないが、安全を守るためのものがある。
- ② 危険はなく、安全を守るためのものもない。
- ③ 危険であり、安全を守るためのものがある。
- ④ 危険であり、安全を守るためのものがない。

①のようなケースは稀であろう。子どもたちの生活の場には危険のない場所はほとんどない。学校のまわりについては皆無とってよい。そのため、常識的に、何かしら安全を守るためのものがあれば安全と考えがちである。しかし、安全を守るものだけに着目すると②や④のようなケースを見落とすことになる。

また、安全を考えると、高齢者や心身が不自由な人々にとってどうであるかという見方もできる。そのような人々にとって安全な町は誰にとっても安全で安心な町であり、そのような町である必要がある。そのような福祉の視点から単元を構成することもできる。

(3) 社会的価値葛藤問題について

子どもたちは、学校の校門という深いかわりのある場所に対して、安全という面から主体的に価値的・実践的な判断をしていった。しかし、社会的価値葛藤問題に迫ることができたかという点では疑問が残る。なぜなら、「安全」そのものはたいへん重要なことであり、それだけでは葛藤にならないからである。

今日、私たちの日常の生活の場には、いろいろな危険がある。安全を守るためのものは決して十分とは言えない。十分でない最大の理由は、経済的問題である。「安全にはお金がかかる。」という

ことである。この事象において、社会的な葛藤が生まれるのは、このような経済優先か安全優先かという対立場面である。中学年の子どもたちが、このような問題にどのように迫ることができるのかできないのかについては明らかにされていない。

5. おわりに

本小論では、価値的・実践的な判断を促すような中学年社会科の授業構成とその実際、問題点について考察した。中学年の子どもたちは、自分とのかかわりの深さを感じることで、価値的・実践的な判断を促されることは確かめることができた。しかし、中学年に特有の授業構成を提案するには至らなかった。また、いくつかの問題点は、課題として残された。今後、さらに研究を深めていきたい。

<注>

- (1) 森分孝治【現代社会科授業理論】明治図書、1984。小原友行「学習の主体性」全国社会科教育研究会【社会科教育論叢】第35集、1988。今谷順重【新しい問題解決学習の提唱】ぎょうせい、1988。他。
- (2) 拙論「社会的判断力を育成する小学校社会科の授業構成」全国社会科教育学会【社会科研究】第45号、1996。